

土屋健作 提出 学位申請論文（課程博士）

『縄文原体の研究』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

土器の表面を縄目文様で装飾する文化は世界各地に知られているが、縄文文化に見られる多種多様さは他に類をみない。その縄文の実体を解明しようとするのが本論文である。容器としての縄文土器の機能と直接関係することのない縄目文様（以下縄文）が、土器の装飾に選択され採用され続けた理由とは何か。結果的に1万年以上続いたこの縄文現象を理解するために、まず当時の縄の在りかたに着目する。つまり縄文施文原体の物理的特性に投影された縄文人の思考・価値観を明らかにすることを目的とする。そのために、山内清男論文に基づく従来の分類・理解を踏まえて、さらに論者の新しい視点を加える。多角的な視点で原体を捉えることも目的としている。

本論は6章で構成される。

第1章では、各種に分類される縄文原体を、視覚面と技術面から捉える。そして縄文人はなぜ縄文原体を製作したか。それは土器表面に表出すべき縄文原体の圧痕を目的としたからである。しかし、目的とした圧痕が縄文原体の総数だけある訳ではない。原体の種類とは製作工程で分別したものであり、圧痕の状態によっては種の判別が困難な場合もある。つまり、目的とした圧痕イメージがあり、これに似た圧痕を得るための手段が複数存在するものであったことを明らかにす

る。この観点から撚り合わせによって作り出そうとした圧痕のイメージを6種類に大別する。そもそも縄文原体とは、装飾・文様としての性格と原体製作、技術の二面性を有し、その空間的広がりと時間的流れから人の動き等に具体的に迫ることができることを主張する。

研究の第一歩は縄文原体の観察であり、その具体的な観察法を提示する。縄目文様は、縄文原体の回転により展開する・プリントされる縄の螺旋状構造であるが、圧痕は原体とは逆転し、この現象は易々とは頭で理解できるものではない。原体観察を経験や感覚ではなく、正確に縄文原体を判別するための理詰めの方法として、節の内部の繊維筋と節・条の反復性を見る必要がある。つまり、複数の繊維束が撚り合わさって形成している縄文原体は、圧痕の反復性を理解することにより、正確に同定することができることを明示する。

第2章では、縄文原体の製作技術の評価として、縄の完成度の追求とそれに関係する技術の観察へと進む。そこで注目したのは“閉じた端”である。閉じた端とは、縄の耐久性に係わるだけでなく、製作工程でも効率性を上げるものである。これをクロス・折り返しと呼称し、概念化する。縄文原体を製作するには完成形の長さ、撚り合わせによる縮小分、折り返しの可能な回数、クロスのタイミングといった工程をイメージする必要がある。その上で、素材となる0段縄の必要な長さ・本数を準備しなければならない。また、両撚りを製作する場合は更なる理解を必要とする。このように製作に不可欠な技術と、完成度を高める為の付加的な技術が融合して「縄文原体製作法」が存在していたと評価するのである。

第3章では、草創期の多縄文系土器様式に着目し、この時期に見られる正反の合について検討する。そして、ここにみる“反撚り”はあえて解ける撚り合わせを断行し、いわばロープとしての機能を危うくしてまで、装飾性を求める工夫を加えたといえるのである。これを正撚りからの逸脱、装飾縄である縄文原体の生まれた画期と評価した。これが縄文文化の早い段階から見られることは重要なことであり、縄文文化のメルクマールの一つである縄文装飾の意識が既に明瞭に形成されていたことを述べている。

第4章では、前期関山式期において最も多種多様な発達を見せる縄文原体を検討する。そして他の遺構・遺物を整理して関係を見究め、当時の社会動態の理解を試みる。

第5章では、縄文時代中期の加曽利E式土器に着目し、中期後半から後期にかけての縄文原体の変容を観察し、原体の種類、節の大きさ、回転方向の3点について具体的に考察する。

原体の回転方向は、施文区画の形状に左右されている事実を喝破する。EⅢ式は口縁部区画が横長区画であるのに対し、胴部文様帯は縦長区画である。つまり、口縁部は横方向へ転がし、胴部は縦方向に回転施文している。これによって口縁部と胴部文様帯とで、条の流れが異なる構成になる。やがて口縁部文様帯の崩壊が始まり、胴部との区画分けが無くなった時にも、動作が残り、口縁部付近だけ横回転する習慣が残る。これが小林達雄の提唱する「文様の三角法」の中で理解される現象であり、動作が効果に影響を与え、逆に効果が動作に影響を与えるようになった典型的な実例であることを明らかにする。

原体の回転方向が有する情報はそればかりではない。縄文の回転方向はその多くが規則性を持っているのに対し、中期後半から後期初頭にかけて、縄の回転方向が安定しなくなる。色々な方向から回転しているのである。縄文を充填すると決めた区画に対し、埋めることに意識を集中、優先し、縄文の回転方向は二の次となっているのである。ここにも磨り消し縄文開始の契機があり、縄文施文部と無文部の組み合わせによってモチーフを表現するようになったからである。「シルエットとしての縄文」に役割が移行していく過程で、縄自体が効果を表現する必要が弱まり、縄文原体の種類が減少し、節も小形化する。同時に、縄文を埋める意識が先行し、回転方向は区画の形状に左右されていく。この「縄文原体の種類」「節の大きさ」「原体の回転方向」の3要素は、中期後半から後期にかけての磨消縄文の定着過程と密接に連動するものであったことを明らかにする。また、この現象はその後の施文具としての縄文原体の役割を大きく変える転換点となってゆくのである。

終章（第6章）では以上の観察を踏まえて、縄文原体と縄文人の装飾に対する感性について考察し、なぜ縄文を施すのかという問題について言及する。

#### 論文審査の結果の要旨

縄文土器は文字通り縄目文様（以下縄文）と不即不離の関係を有する。山内清男によって、昭和6年前後に原体と施文法のほぼ全貌が解

明された（1979『日本先史土器の縄紋』）。しかし、これまで山内の原体論をそのままに受容継承して、せいぜい縄文を観察し、種類を同定するにとどまっていた。本論は、改めて縄文に真正面から取り組み、新しい地平を拓くものである。

本論の基本は、山内の原体研究に則りながらただに追従することなく自らの視点を確立し、独創的な展開に成功している。

まず、山内の原体論において、原体圧痕の視覚的領域および原体製作の技術的領域から命名された二つの概念が混在し、適宜に使い分けられている事実を指摘する。それ故、製作工程が異なれば別の種と認定され、視覚的な圧痕の表現との差異が必ずしも区別されなかった弊害を批判的に整理する。つまり、縄文施文原体とは土器面に表出された縄文としての圧痕を獲得するための道具と位置付けるのであり、妥当である。原体の製作段階は、あくまで土器面の縄文への途中経過であり、原体の製作や種類の作り分けが縄文人の第一義的動機でないことを厳然と確認する。目的は原体を用意することではなく、器面の圧痕にあったことを過たず指摘したことは重要である。自ら研究に正しい方向性を与えている。

この視点からすると、原体は山内がみごとに解き明かしたように多種多様であるが、結果としての圧痕のバラエティーは原体の各種類にいちいち対応するのではなく、極く少数に限定されることを明らかにする。これを6種類に大別する独創性は高く評価されよう。逆に言えば、限定的な圧痕のイメージに対してそれと似た圧痕を獲得する手すじが豊富に存在したことを意味する。この性質こそが縄文原体の重要

な特色として評価すべきとする主張に本論の真骨頂をみる。いわゆる羽状縄文はその間の事情を物語る好例である。つまり、結束第1種の原体1本によってたちどころに表現できるほかに、左右別々の撚りの2本を用いる場合、あるいは1本の原体の回転方向を直交させる手法があり、いづれによっても羽状縄文効果を実現し得るのである。

縄文に似て微妙な差異を示す擬縄文がある。ヘナタリなどの小形巻貝やオオバコの穂などを原体とする回転圧痕文が縄文に極似していて、文様効果に優先的な関心を寄せた縄文人の心性が浮かび上がってくる。

原体製作における、その太さや長さにも着目する。1段より（片撚り）から2段撚り（単節縄文）、3段撚り（複節縄文）を目的とする場合、当初の繊維を2折、3折、4折と進行させる過程で、太さを増す分も働いて1/2以下、そのまた1/3以下、さらに1/4以下と極端に長さを減じてゆくこととなる。それ故、予め承知の上で用意された長さは、しばしば50cm以上にもなることを指摘する。実験的な経験によって、縄文人と撚り紐とのかかわり合いの無視し得ない臨場感がある。

そもそも縄文世界に根強い伝統が維持され、広く普及する縄文は、縄文時代草創期に始まることを確認する。その背景には、道具として利用されていた複数の縄とその製作技術が前提となることが予想される。それが視覚的な文様効果として土器面に導入されたわけであるが、当初は原体の側面あるいは先端の圧痕であった。この線と点の効果が視覚的領域において主張して文様イメージとしての意味を確保

し、縄文人の意識もこの点に集中したのではなかったか。線と点が別々の原体および、押捺する、突き刺すという別々の施文動作が止揚され、一本の撚り紐で実現するに至る。ここに「正反の合」の撚りの発明工夫と採用の意義があったとする理解は実体化過程の仮説に関連するものであり、極めて興味深く、傾聴に値する。圧痕としての縄文と原体との関係の新しい始まりであり、世界に比類のない縄文発達の動機が潜んでいることが示唆される。

ところで、文様目的の原体のなかには、時と所を違えて再三、再四登場する撚り戻しの種類がある。正撚りにくらべて、撚りをかけるのにも厄介なばかりか、せっかくかけた撚りは容易にばらけてしまうのであり、道具としての実用には適わないはずである。ここにはじめに縄文圧痕イメージがあって、実用品の延長にはない、縄文用の原体を独自に創意工夫していた実態が明らかとなる。この指摘も縄文土器における縄文のあり様を示すものとして重要である。

その他、縄文の変遷に見られる省略、手抜き概念、中期加曽利E式土器にみる文様の区画に従って回転方向がタテ、ヨコに規制される事実から後期の磨消縄文の多方向回転手法など評価すべき指摘も少なくない。

総じて、停滞気味の縄文原体研究に新鮮な視点で基本的な問題から今後につながる分析と解釈があり高く評価される。

ただし、原体の種類分布のあり方から竪穴住居型式や炉形態あるいはその他の遺物との関係を読み取ろうとする試論については未解決であり課題が残る。むしろ原体とその他の文化的要素とが単純な相関

関係を持たなかった点に注意し、抜本的な思考の転換も必要とされる。また、撚り合わせには厄介な言うことを聞かない三本撚りの存在を単なる原体製作と圧痕効果だけの問題にとどめず、聖数など縄文人の観念的世界にかかわる可能性などについても視野を広げてゆくことが期待される。

以上のことから、本論文の提出者土屋健作は、博士（歴史学）の学位を授与される資格を有するものと認められる。

平成 22 年 2 月 18 日

主査	國學院大學大学院客員教授	小 林 達 雄	㊞
副査	國 學 院 大 學 准 教 授	谷 口 康 浩	㊞
副査	早 稲 田 大 学 教 授	高 橋 龍三郎	㊞